
転生女の独白

晴耕雨読。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生女の独白

【Nコード】

N4246Z

【作者名】

晴耕雨読。

【あらすじ】

「私」は二十六歳。女。現在は独り暮らしで、OL。……のはずである。今、断言できないのが悲しい。なぜなら目を開ければ見知らぬ部屋。しかもどうやら、この身体は「私」ではない……？
？ のちのシスコン女の独白……いや、独走物語。

女、赤ん坊になる（前書き）

日記風なので、この話の中でも大きな段落ごとに月日はけっごう違
います。いきき経過していたりします。

女、赤ん坊になる

なにがなんだか。

目が覚めれば、見覚えのない部屋。

いったいどうなっているんだ。

起き上がろうとすれば、立ち上がらない身体。

助走をつけようともがけば、視界に入る小さな手。

いったいどんなっているんだ。こりゃあ。

考えようとすれば、シャットアウトしようとする頭。

……ああ、眠い……。

今頭をしめるのは、もう頭を悩ます疑問じゃなく。

このまま身をまかせれば心地よくなれるという本能だけだった。

ほら。いまも睡魔という美しい女性がこちらへ手招きしている。

ああ、向こうは楽園だ。

どうしてあらがう必要などあるつか。いや、ありはしない。

そして……。

私は誘惑に負けた。

**

うむ。どうやら私は赤子らしい。いや、訂正。赤子である。(ちなみに女の子)

それに行き着くまで一年かかった。

いや、どれだけ鈍いんだとか言うなよ。

だって、先ほどのことを何回も繰り返していたし。

睡眠にはあらがえません。(きっぱり)

そんな中、起きている少ない時間で考えた結果である。

まあ、現にまた眠たくなる理由も納得できるしな。

……私と同年代くらいである二十代の女性にそう軽々持ち上げてもらえないし。

赤子は恐怖がいつぱいだ。

離れてみれば日常でよく使っていた物だと分かるが、近づいて見るとほとんどの物が何が何だが分からなかった。

さすがに足蹴されそうになったときは、焦った。

目線の高さが変わるだけで、こども違うとは……。

最初の頃は、巨人の国に迷い込んだのかと真剣になやんだものだが、私が赤子なら納得。

それにしても……

「由紀ちゃん。ご飯よー」

……うむ。授乳のときはあれだな。恥ずかしい。

しかし、欲求というのは逆らえないものなのだとつくづく感じる。一口含めば、恥ずかしさなんてどこに行ってしまったのか、腹を満たすのに必死になってしまった。

……食後の我に返ったときの心情といったら。……なにもい
うまい。

今はもう哺乳瓶だが、はやく離乳食になりたいものだ……。

**

今日は私の誕生日。

今年で二歳になる。

二回目の誕生日で気づいたのだが、わたしは12月の冬生まれだ。
冬 雪ゆき 由紀ゆき

……まさかな。

両親はにこにここと、ろうそくの火を消そうをする私に注目。

視線がいたいわ!

父の手には、ばつちりカメラ装備。いまかいまかとシャッターチ
ヤンスをうかがっている。

母は私の後ろから軽く抱きしめるようにして、私の肩から顔をの
ぞかせる。

……うん。主役わたしよりも、ずっとずっと嬉しそうだな。

正直言つて、お人よしで人からだまされそうな父と母。

まだ二年の付き合いだが、近々それに「単純そう」「もプラスされ
るだろう。

だが。

この人たちと家族なもの、そう悪くない。

**

二歳になってからというもの、舌がだんだんまわってきた。

こつそり鍛錬していたおかげだろうか。

といつても、とうてい心の中でいつているのがそのまま言えるほど、流暢になんてしゃべれない。

一歳の頃から、母が読み聞かせが好きなのかよく本を読んでくれた。

車のイラストがあったら「これはぶーぶだよ」なんて丁寧に説明してくれながら。

だからつい、「ぶーぶは？」なんて質問されたからとつさに車を指した。イラストのではない。本物のだ。

やば。まず。ふつう一歳児はそこまで理解しないか？

なんて思つて時にはすでに遅し。

「きゃー！！ 由紀ちゃん、天才っ！！」

さんざんはしゃぎまわった挙句、仕事から帰ってきた父に一番に報告していた。

その後のことは言うまでもなく。ただ、ほんとに父と母は似ているな……と実感した。

テンションについていけないわ……。

でも、そういうことが多々あったせいか二歳になって、たどたどしくも私が文章として言葉をしゃべりだしても二人は気味悪がず、むしろ「さすが私たちの子！」と喜んだ。

きつと、この二人だからだろうな。

二人が両親でよかつたと思つた瞬間だった。

まあ、ちよつとアレだが。

最近、周りがるさくなつた。

噂が噂をよんだのか、今では私は神童とよばれているらしい。

そうして今日もまた、それにつられた人が私を試すように質問していく。

つたく。こつちは公園で遊んでいるんだよ。……一人でだけどなにか？

それなのに、こんな名前も知らない子連れの女性が「 $10 + 16$ は？」なんてふざけた問題をだしてくる。

教育ママとして対抗心でも抱いたのか、好奇心でなのか、どちらにしてもいきなりとは失礼な大人だな。

「26」と無愛想に答えてやると、指も使わずあっさり答えたとに驚いているのか、こちらを信じられないような顔でみつめてくる。……ほんとに失礼なやつ。

この脳みその中にはもとから二十数年分の知識・情報があるんだ。積み重ねていかないと勉強したことが忘れていくとしても、まだ中学生の内容はわかる。

まあ、理科とかは怪しいけど。

たとえ忘れていたとしても、一度やったことだからはじめて勉強する者よりは身につく時間ははやいだろう。ある意味、予習してあるのと同じなのだから。(しかし高校生までの内容に限る)

ましては、足し算引き算など。ひらがななど。一般常識だ。

たしかめるように、何度も何度も問題をだしてくる。十桁・百桁の足し算、引き算。あげくのはてには掛け算、割り算まで。

あまりにもうざく、しつこいのでムカついた私は次々に遠慮なく答えてやると、女性はまた固まった。……おい、手をつないでいる子供が家に帰りがっているぞ。

別にこの女性を待つ理由もないしな。時間の無駄だし。

私はその女性を無視して中断させられた遊びを続行する。

……うむ。砂遊びは面白い。久しぶりにやったが、はまるな。

「由紀ちゃん。そろそろ帰りましょーう」

もう、そんな時間か。

今回も邪魔されたしな。

ん？ そういえば、さっきの子連れの失礼な女性は……。

そうおもって、さきほどまで固まっていた人物がいたところを見ると、彼らはいなかった。

……最後まで、失礼なヤツ。

まあ、いいや。

さて、今夜の夕飯はなんだろうか？

次の日も、次の日も。

いまこの遊びが流行っているのか？ 暇人ども。

なんて思うくらい、大人たちが私へ質問してくる。くだらない。

そう思いながらも、無視すればいいのにそれに答える私も……
くだらない。

私がやることひとつひとつに、大げさなくらい反応する大人たち。つは。なんだそれ。ただいま、B級喜劇のコント上映中ってか。

そう思うくらい、彼らはあまりにも滑稽すぎた。

……すごいわ！ なんて頭のいい子なの！

そんなの当たり前。

……もうこんなにすらすらできるなんて！
だって、ズルしているのと同じだもの。

アア、 スベテ ガ クダラナイ。

毎日がつまらなくてすべて達観したような私は、しかしこの先自分の「今まで」の人生を捧げたいと思うほどの存在に出会うことに

なるとは、思いもよらなかった。

女、天使に出会う（前書き）

日記風なので、この話の中でも大きな段落ごとに月日はけっころう違
います。いきいきに経過していたりします。

女、天使に出会う

胸が熱い。

熱が侵食していくような、
手足まで犯されるような。

目が熱い。

目から液体が流れてくる。

自分の体にいったい何がおこったのか。

もうなにがなんだか分からない。

ああ、でも。

……やっと見つけた。

もう一人の自分がそう囁いたのが分かった。

それは、私が三歳になる二ヶ月前のことだった。

木の葉たちが化粧を شدしだす、10月。

ある病院で、新たな生命が生まれた。

そして。

私は、天使に出会ったのだ。

**

かわいい。
かわいすぎる。

なんなんだ、この生物は。
いまだって、ほら。

必死に小さい紅葉のような手を伸ばして、私に微笑んでいる。
天使だ。

天使に違いない。

こんな最凶なかわいさ、人外だ。

この天使であり、人類最凶な生物は私の妹である。

もう一度いう。私の妹だ。

名前は「亜希」。

10月 秋^{あき} 亜希^{あき}

……もうなにもいうまい。

**

今年は特別な年だ。

なんせ、今年をはじめての妹の誕生日祝いだ。

もう、一歳になるのか。

うむ、誕生日は派手にいこうじゃないか！

なんて三ヶ月後のことに思いをはせる。

しかし、今年が特別なのはそれだけではない。

妹が一年成長するのと同じように、私も一年成長する。

三歳になるのだ。

この三歳というのは私のなかで大きな節目だった。

そして、覚悟を決めるべき年であった。
前世の「私」と向き合う覚悟を。

この記憶と一生付き合う覚悟を。

「私」のときの記憶はもう、少ない。

覚えているとしても、まるで霧がかかっているかようにつつすらだ。

まして人物の顔など。

母親がショート黒髪なのも、父親が恰幅がよかったのも覚えて
いるが、顔だけが黒く塗りつぶされている。

もう、映像として記憶に残っているのは無いに等しいのだ。

ただ、「私」は今二十歳（計算すれば一の位の数は出るが、あ
えて伏せる）で3大家族、上京して独り暮らししていたこと、一般
常識・知識などの情報だけが今に残っている。いや、こびりついて
いるという表現のほうが正しいだろう。

……「私」の名前は？ 由紀……じゃない、ユイ、ユミ、ユ
リ……。あっ、そうだ。「小百合^{サユリ}」だ。よく、お前は名前負けして
いるなって言われてたんだ。

自分の名前を思い出すのに、30秒近くかかった。

……母親の名前は？ ミチコ、ミチル、ミサコ……いや、そ
もそも三文字だったか？ 初めの文字は「み」であっているのか？

ああ、あの時はすぐ思い出せていたのに。

まだ、覚えていたのに。

どんどん「私」の記憶が消えていく。

それが怖いなんて一度も思ったことは、ない。

むしろ、安心したのだ。

……はやく「私」の記憶がなくなってくれ。

……はやく“普通”にもどしてくれ。

いつまで「私」の記憶が残っているんだと思うと、その先の未来
が怖くて。恐ろしくて。

三歳になるまでには「私」についての記憶はなくなっているはず

だ。

……大丈夫。だんだん消えていつているもの。

そう自分に言い聞かせて、「私」の存在に目をそらしつづけた。

……大丈夫。いつかは消えるもの。

しかし、うすれていく記憶は決して最後まで消えず、今ではもう「私」が私の自我になってしまった。

……もう、遅かった。

だって、嘘だろう？

現実のほずないだろう？

なまじ「私」の記憶がある分、いまの状況は“異常”だと誰よりもわかつている。解かっているのに……！

なんだってこんなはめになっているんだ。

今思えば、あんなにも眠っていたのはただ単に赤ん坊だっただけではなく、受け入れられない現実から頑なに目をそらすうとしていたからかもしれない。

この年、「私」は私として、如月由紀（おきよ）として、ようやく産声をあげた。

女、一番星を探す（前書き）

日記風なので、この話の中でも大きな段落ごとに月日はけっころう違
います。いきいきに経過していたりします。

女、一番星を探す

会社で父が倒れた。

冗談のような電話の内容に、私たちはすぐ父がいる病院にかけた。

それはなんの変哲のない日のことだった。

いつも通り母が一番早く起きて、私・妹・父の順で起きて食卓につく。

いつものように父が八時ごろ「いつてきます」といって母の頬にキスをする。

その様子を、いつまで新婚気分なんだか、なんて思いながら見つめていると父はこちらに目をつけて私と妹をハグする。

毎日毎日繰り返している、なにも特別なことも予定もない一日の始まりだった。

だから、家で母と妹と遊んでいたときかかってきた電話が、今までの日常をぶち壊しにするとはいったい誰が想像できただろうか？

**

「最善は尽くしましたが……」

無常にも医者も告げる。

父は亡くなった。

まだ三十代前半という若さで。

母は詳しい原因は教えてくれなかった。

四歳児にそんな酷なことを教えても理解しないと思ったのか。

ただ「お父さんはお星様になったんだよ」と、私と妹を抱きしめて母は言った。

たとえお父さんがそばにいなくても一番星になって私たちのことを見守っているのよ、と。

こらえきれない嗚咽を含んで。

私たちを抱く手に力をこめて。

だから私もなぜ死んだのかは聞かなかった。

**

悲しい。いや、虚しい。

このまま身体を燃やされて、終わってしまうのか。

これで、これだけで。たったこれだけで。

父の葬式中、行き場のないもやもやがどんどん私の胸で大きくなっていく。

父の葬式には、地域のひとや親族の人たちだけではなく、父の会社関係の人なのか、見知らぬ大人たちも大勢来た。

・・・父は周りから愛されていたのだな。

だってこんなにも大勢のひとから悼まれるのだから。

こんなにも泣いてくれる人がいるのだから。

だが、私の心のもやもやは消えない。

だって、いま泣いている人たちだって、悲しんでいる人だって、もしかしたら私のことを忘れてしまっかもしれないでしょう？

- - - 「私」？

…… ああ、そうか。

何かが、胸の中にストーンと落ちた。

私は、父と重ねていたのだな。

前世の私と。

前世の私が亡くなった後のことを。

**

母は仕事をはじめた。

彼女はこれから女手一つで娘二人を育てていくのだ。

父が亡くなってから、母は変わった。

もちろんいい意味で。

しかし、どこか危ない気がする。

つつつけばいとも簡単に崩れてしまいそうで。

父が亡くなった日以外、私は母の涙を見ていない。

父の葬式でも涙を見せなかった。

二歳児の妹は頭で理解しているというよりは、周りの悲しみに満ちた雰囲気にもまれてぐずっていた。

泣かない私も、まだ死を理解していない子供だからという風にみられていただろう。

だから、そんな幼い子供二人を育てていくことになった母に、周

りは同情のまなざしをむけた。

そんな視線を振り払うかのように、彼女は強くなったのだ。

- - - 強く見せかけたのだ。

それに気づいたのが、ずいぶん後になってからだった。

**

それは偶然だった。

もし、この偶然がなかったら私は一生気づかないままだっただろう。

そう考えれば、これは偶然ではなく必然だったのかもしれない。

夜、といっても10時ごろ。

妹と一緒に就寝していた私は（子供の身体だとすぐ眠くなるのだ）トイレに行こうと布団からでた。

冷たい廊下をぺたぺたと歩いてみると、リビングの電気がついているのに気づいた。

母がまだ起きているのか？

母の後姿が見えたため、そばに行こうとした。

しかし、私は固まってそれ以上進めなかった。

- - - 母が、母が泣いている。

彼女をおいていった愛しい人の名前を呼びながら。

あふれ出る何かをせき止めるように声を押し殺して。

しかしこらえきれなくて漏れた嗚咽が、言葉が、あまりにも痛々しくて。

彼女はたったひとりだった。

親に置き去りにされた子供のように。

家でも新しい職場でも、彼がいなくなった瞬間に彼女はたった一人りになってしまっていたのだ。

この後、どうやって私は行ったのか覚えていない。

わたしは彼女を後ろから抱きしめていた。

「母さん」

一瞬、びくつとなったそれ。

ずいぶんここにいたのか、その身体がひえきっていた。

「由紀ちゃん……？」

泣いているとき特有の聲が、ふるえる。

「い、やあね。わたししたら。こんな恥ずかしいところみられちゃって」

手で涙をぬぐっているのか、身体が少し動く。

「母さん。恥ずかしくなんて、ないよ」

女の勤なかわからない。ただ私はなぜか頭のどこかで、母が私たちが寝静まった頃一人で泣いていたのが一度や二度だけではないことを悟っていた。

私はただ母に伝えたかった。

「私は母さんの隣にいるよ。私だけじゃない。亜希もいるよ。近所のおばあちゃん、おじいちゃんもいるよ。たくさんいるよ。だから母さん、」

……他の人を頼ってもいいんだよ。私を頼ってよ。

そう続けたかったが、言葉にならなかった。

彼女が、母が、私を抱きしめたのだ。

「由紀ちゃん……っ、由紀ちゃん……！」

止まることを知らない彼女の涙に、私もなぜか涙がでた。

……父よ。見ているかい？

母には父がいるように。

父には、母がいる。

彼女なら彼をずっと思っていてくれる。

忘れないでいてくれる。

-. -. 父よ。あなたは幸せ者だ。

願わくば、「私」にもそんな人物がいたことを。

女、二度の小学生（前書き）

日記風なので、この話の中でも大きな段落ごとに月日はけっごう違
います。いきいきに経過していたりします。

女、二度の小学生

今年の春、私はピッカピカのランドセルを背負う。

ピンクの綺麗な衣装を着て。

黄色い帽子をかぶって。

胸には「入学おめでとう」の文字がついてある花のピンをつけて。たとえ「私」は二度目の体験でも、この体では初めてのことだ。

そしてもう二度と、体験できない。最初で最後の晴れ姿。だから父よ。

あの時のように、手にカメラを装備してこの姿を撮ってもらいたかったよ。

**

今日は入学式。

地元の子達が集まるから、やはり顔見知りがけっこういる。

あつ、あの子保育園のとき一緒に組だった子だ。

（母が働きはじめたので、私たちは保育園に入園していたのだ）この小学校は、学年ごとに三クラスずつある。

そう遠くないところにも小学校はあるのだから、少子化のわりに

はここら辺に住んでいる子供たちの人数が多い。

そわそわそわ。がやがやがや。

机の上の端に張ってあるひらがなで大きくかかれた自分の名前をたよりに、それぞれ自分の席を探していく。

あつた、あつた。

真ん中の列のこれまた真ん中。

一番初めは名前の順だからなのか、窓際の一番後ろとかにはならなかった。……残念！

机の上にはこれから学校生活で使う道具たち。

うむ。これらすべてに名前を書くことになるんだろな。

そうこう思っているうちに、教室があつという間に初々しい児童たち（保護者付き）でうまった。

おつ。あの後姿、近所で有名な悪ガキじゃないか。

一丁前に緊張しているのか、妙に背筋がいいな。うける。

黒板には、“入学おめでとう”と大きな字を中心に桜の花や動物がチヨークで描かれている。

ああ、確かにこんな感じだった。なつかしいな……。

さて。私は私なりに小学校生活を楽しましますか。

**

小学生になって一番つらいこと。

周りのテンションについていけない。

授業がねむい。

小学生にたまたに鋭いことを言われる。

クラスになじめない……ことはない。むしろなぜか頼りにされている。

そんなかまってもいないのに。……このクラスはDM集団か？
まあ、たしかにいま挙げたものはつらい（というか疲れる）こと
だが一番はそれじゃない。

……妹のことだ。

毎朝「お姉ちゃん、一緒にいて……！」と泣きながら私にすがりつくのだ。

そしていつも遅刻ぎりぎりまで押し問答。結局は泣く泣くお別れとなる。（というか、母が妹を保育園に行かせるために車に乗せて
いってしまうのだ）

いや、別にやろうと思えばすぐ妹を振り払えるんだよ？

でも一体誰がそれをやろうとするだろうか。やれるやつは鬼畜だ。
実際に体験してみれば分かる。

「いやだ！ お姉ちゃん、一緒にいて……！」

そこまでねだられたら……！

そんなかわいいことを言われたら。

そんな目で縋られたら。

答えはひとつ！

「もちろん！ 一緒にい「由紀ちゃん？ 学校行くわよね？」……」

母のさりげない一言で、私の言葉はぶった切れた。

……母よ。父が亡くなってから、イイ性格になったな。

私は知っている。

これもすべて私のためだと。

周りからどこか浮いている私を、学校という社会になじませるためだと。

母はにこにここと泣きべそかいている妹に近づく。

「亜紀ちゃん？ お姉ちゃんのことが好きよね？」

「うん！」

「かわいくて勉強も出来る素敵なお姉ちゃんが好きよね？」

……あれ？ 母よ。何か含みがあるように思えるのだが……。
「うん！ 亜紀ちゃんはそのなお姉ちゃんがいていいな〜ってみんなが言うの！」

「自慢できるお姉ちゃんて嬉しいね」

「うん！ お姉ちゃん大好き！」

……っ！！ 私も君が大好きです！

太陽のような笑みで私への愛を言う妹の耳元に、母は顔を近づけていきなり声をひそめる。

「じゃあ、大好きなお姉ちゃんにプレゼントをつくらうよ」

「ふれぜんと？」

「そう！ 内緒でつくってお姉ちゃんをビックリさせよう。きっと喜ぶだろうな〜」

「……！！ ふれぜんと……！！」

なんだ、なんだ。内緒話か？

母に入れ知恵させられた妹はパアアと顔を輝かせたあと、とてとと私の目の前に来る。

「お姉ちゃん、やっぱり亜紀大丈夫！」

からだをもじもじしながら妹は言った。

なんだと！？ さつきと違うじゃないか！

今度は私がダダをこねようと口を開くが、

「亜希は本当に、かわいくて勉強も出来る素敵なお姉ちゃんが好きよね〜」

またしても母の一言で、妨害された。

……母よ。さりげなく私に釘をさしてくるな。

無意識か、無意識なのか？ ……無意識だったらこわいな。

わかった。わかったよ。

“かわいくて勉強もできる素敵なお姉ちゃん”だもんね。

学校なんて休まないさ。

つまらない授業も手を抜かずにがんばるさ……。

「亜希。学校が終わったらすぐ亜希の元に行くから」

うるうると涙を湛えていたまんまるい目はどこにいったのか……。今はにまにまとかわいい笑顔をみせる妹に向かって言う。

別に寂しくなんかないんだから……！

私が三年生になれば、妹も小学生になるんだから！

あと少しの辛抱よ、がんばれ私！

今はむしろ、妹より私のほうがダダをこねそうになる今日この頃である。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4246z/>

転生女の独白

2011年12月18日00時50分発行